

人格の偉大性に関する心理学的研究

——(その4) 特に、母親から見た高校生について——

藤 田 主 一

I. 研究の背景と目的

人の個性 (individuality) を捉える心理学的な概念は多様に存在する。中でも人の性質に関する概念には、気質 (temperament), 性格 (character), 人格 (personality) などがある。気質は生まれつき備わっている生理的基盤にもとづいた特徴であり、個人の行動特徴のうちで感情的な反応に深く関係している部分である。性格は個人の行動の仕方の特徴づけ、静態的で固定的な個人差を問題にする。人はその時々状況に応じて種々の行動をとるが、その行動は比較的一貫した様式を持つものである。これに対して、Allport, G. W. は「人格とは、個人の特徴的な行動や思考を決定づける個人内のダイナミックな精神身体的なシステムである」と定義している。ここでいう「ダイナミック」とは「力動的」ということであり、また「精神身体的システム」とは個人に内在しているさまざまな組織や体制のことで、それらは相互にかかわり合い、決して切り離すことができない体系である。この定義では、人格とは、①精神と身体の両方の機能が統合されたシステムであり、②システムは環境との相互作用のなかで力動的に変動し、③個人に特徴的な行動や思考を生み出すベースになっていると考えられる。人が日常生活の中で他者の個性を認知し、また他者との人間関係をスムーズに遂行していく上で欠かせないものは、個人が持っている人格 (個人の全体像であり、特定の性格のように価値基準のみで形成されている狭義の概念とは異なる) を的確に把握することであろう。

本研究は、人格研究の中でも特に人格の『偉大性 (greatness)』を構成している要因や背景を明らかにすることが目的である。『偉大性』という概念は、通常「偉い人」や「立派な人」などといわれる個人を構成する要因を指すものであるが、その概念に必ずしも明確な定義が存在するわけではない。ところで、私たちが他者を「偉大な人、立派な人」とであると認識する基準はどこにあるのだろうか。ある人は「艱難辛苦を乗り越えて立派な業績をあげた人」を思い浮かべるだろうし、他の人は「良識のリーダーシップを発揮して国家国民を治めた人」や「弱者を思いやる気持ちがある人」を持ち出すだろう。辞書等によれば、『偉人』や『偉い』の意味は「偉人＝偉大な人、すぐれた人、大人物」、「偉い (人)＝すぐれている (人)、人に尊敬されるべき立場にあ

る（人）」という解釈が一般的であるが、「非常に立派な仕事をした人」「すぐれた能力、性格などを備え、偉大な業績を成し遂げた人」「世のためになるような立派な仕事を成し遂げた人」という解釈も見受けられる。もちろん、『偉大性』の心理学的な構造と一般的認識との間にどのような差異が存在するのかは十分にわかっていない。今日まで、主として欧米の研究者たちが「偉大な人（偉人）」として取り上げられた人びとについて独創的な研究を進めてきた。たとえば、素質的な高い能力から稀にみる業績を成し遂げる（知性や業績の傑出）、人間的に素晴らしい特性から人びとに尊敬される（性格や活動の高揚）、非常に立派で世のためになるような仕事を残す（社会的名声や貢献の拡大）などの事実にもとづいて、「偉大」な個人を生み出す背景を明らかにしようとしてきた。そこでは、傑出した人＝偉大な人＝偉大性という学問的確認は得られていないが、彼らは何らかの偉大な人格を保有していた可能性も否定できない。ここで問題になるのは、私たちが特定の個人を「偉大な人」または「立派な人」と評価する基準をどこに置いているのかを研究すること、「偉大な人格」が形成される発達のメカニズム研究することである。歴史的な偉人・天才の研究も同様に考えていかなければならない。

筆者¹⁻⁹⁾は、『偉大性』を評価する40項目の質問票（表1）を作成し、これらを用いて種々の検討を重ねてきた。項目の選定については、大学生を対象とした予備調査の結果にもとづいている。自由記述によって「偉大な人」または「偉い人」を指し示す表現を収集し、得られた記述を

表1 『偉大性』に関する40項目の質問票

1. 一生懸命に努力する人	21. ルールや決まりをきちんと守る人
2. 発明や発見をした人	22. 立派な成績や記録を残した人
3. 家族のために行動する人	23. 社会に役立つことをしている人
4. 頭のよい人	24. 賢い人
5. 心が広い人	25. よく気がつく人
6. 自分の考えをきちんと言える人	26. 何事にもくじけない人
7. 社会で大きな仕事をした人	27. ノーベル賞をもらった人
8. 自分を犠牲にできる人	28. 電車でお年寄りに席をゆずる人
9. 豊かな知識がある人	29. すばらしい才能を持っている人
10. 性格がやさしい人	30. がまん強い人
11. 何でも最後までやりとおす人	31. 何にでもチャレンジする人
12. 大統領や総理大臣になった人	32. 歴史の教科書にのっている人
13. 社会のためにつくしている人	33. ボランティア活動をしている人
14. 判断力や決断力のすぐれている人	34. 頭の回転が早い人
15. 真面目な性格の人	35. 誰からも好かれる人
16. 自分の夢を実現しようと頑張る人	36. 物事に真剣に取り組んでいる人
17. 世界的に有名な人	37. 著書をたくさん出版した人
18. 困っている人を進んで助ける人	38. 世界平和のために貢献している人
19. 社会の出来事をよく知っている人	39. すぐれた技術を持っている人
20. 責任感の強い人	40. 思いやりのある人

類似性の高いカテゴリでまとめ、仮説的ではあるが『偉大性』の5因子（BASIC）構造を想定した。従来の研究結果から、この5因子は安定していることが確認されている。

- (1) 行動の基準と努力……………『達成行動の強さ』因子……………Behavior
- (2) 仕事や業績……………『知名度と高業績』因子……………Achievement
- (3) 社会や家族への貢献……………『社会活動の貢献』因子……………Social contribution
- (4) 知的能力の高さ……………『知的能力の高さ』因子……………Intelligence
- (5) 性格や人柄……………『性格や良い人柄』因子……………Character

本研究では、特に高校生を子ども（息子と娘）に持つ母親を対象に、我が子をどのような視点から捉えているのかについて検討することが目的である。また、その記述内容と我が子への受容性の水準が合致しているのかについて、上記仮説とも関連させながら明らかにしたい。

II. 研究の方法

1. 調査対象者

本研究の調査対象者は、埼玉県内の県立A高等学校に通学する高校生を持つ母親92名である。その中で、息子を持つ母親が43名、娘を持つ母親が49名である。今回、2名以上の高校生を子どもに持つ母親は含まれていない。また、高校生は1年生36名（男子20、女子16）、2年生39名（男子11名、女子28名）、3年生17名（男子12名、女子5名）である。母親の年齢は39歳～57歳であり、平均年齢は46.7歳であった。

2. 調査材料

調査材料は、母親から見た高校生の実態を純粹に把握するために、自由記述による方法が採用された。母親の属性（年齢、家族状況など）などを求めたフェイスシート（匿名）に続き、高校生としての子どもの実像を確認させる意味で、「息子・娘は」という単語に続いてアンダーラインだけが設けられている設問（合計15行）が連続しているA4判の質問紙を用意した。これは、20答法（Twenty Statement Test：TST）を改訂したものである。従来、心理学的研究で用いられている20答法は、「私は」という言葉の後に20種類の自分自身の異なる側面を書かせるもので、自己に対する意識を捉えようとする有効な方法である。ここでは、調査時点で母親自身が理解している「息子像」あるいは「娘像」を描き出すことが目標である。

3. 手続き

- (1) TST形式の回答方法に対して「あなたの高校生のお子様（息子・娘）のことについて、今、感じていること、思っていることを、できるだけ多く下線にお書きください」という指示を与えた。なお、記述内容の種類や記述量（記述回答数）の多少などは、記入者（母親）

の自由であることを付け加えた。

- (2) 特別に制限時間を設けていないが、大多数の母親が記入し終わったのを確認して、「書いていただいた中から、あなたが我が子について一番主張したい文章（一番残しておきたい文章）はどれでしょうか。あなたが書いた中から1つを選んで○印をつけてください」という教示を続けた。
- (3) 調査は、同高等学校の保護者対象講演会の直前に実施された。

III. 結果と考察

1. 記述内容の検討

調査対象の母親から得られた記述総数は478答であり、これは総記述予定数（92名×15答）の34.6%であった。また478答のうち、高校生の息子についての記述は216答（33.5%）、娘についての記述は262答（35.6%）、母親1人あたりの平均記述数は5.2答（range 2～13答）であった。1つの回答の長さに個人差はあるが、ここでは文意を取り上げることにした。

記述内容の分類には、創始者であるクーン（Kuhn, M.）の分類（合意反応・非合意反応、ローカス・スコアなど）や、数種類のカテゴリー化（社会的記述項目、自己についての記述項目、外的事象への関心・欲求・希望についての記述項目など）、回答の追跡分析などを参考に、5種類のカテゴリーとその下位項目に分類することを試みた。すなわち、以下の方法である。

- (1)家庭内の様子：①家族関係（親子、きょうだいなどの関係）、②家庭内での役割分担（家庭内での仕事の分担、家の手伝いなど）、③家庭での勉強の取り組み、④勉強以外の行動（遊び、趣味、娯楽、生活全般など）、⑤その他。
- (2)学校内の様子：①先生との関係、②友人との関係、③学校での勉強の取り組み、④部活動への取り組み、⑤進路への取り組み（進路希望、進路先、受験など）、⑥勉強や部活以外の学校での取り組み（全般的な様子）、⑦その他。
- (3)内面的な自己表現：①性格の傾向（明るさ、素直さなど）、②態度の傾向（意欲や努力の程度など）、③能力の傾向（能力、技能、考え方など）、④その他。
- (4)外面的な自己表現：①容姿へのこだわり、②服装へのこだわり、③化粧やおしゃれへのこだわり、④その他。
- (5)精神・身体の健康：①疲労感、②悩み、③病気、④精神的安定、⑤健康、⑥その他。

以上ような大きく5種類にカテゴリー化した子ども像に対して、母親自身がどのような感情を抱いているか（表現しているか）を分類した。ここで扱う感情群は、以下の3種類である。

- (1) 接近的な感情群：親の安心，期待，喜びなどのプラス的な水準。
- (2) 回避的な感情群：親の心配，不安，不満，気づかいなどのマイナス的な水準。
- (3) 客観的な感情群：事実を客観的に記述する冷静な視点の水準。

上記の「5 カテゴリー」×「3感情」を用いて，具体的な母親の記述例を分類すると次のようになる。以下に，分類例のいくつかを列記する。

- ① 勉強は家ではやる気がなく心配です。(家庭での勉強／心配)
- ② 今どきめずらしいくらい性格が良いと思います。(性格／満足の表現)
- ③ 親と外出したがらなくなった。(家族関係／客観)
- ④ 進学を目指している受験生だが，のん気で困る。(進路／不安)
- ⑤ 家事に積極的に参加し，母親の健康を気づかってくれます。(役割分担／喜びの表現)
- ⑥ 高校生活に満足しているようです。(学校生活／客観)
- ⑦ 会話をもっとしてほしい。(家族関係／不満)
- ⑧ おしゃれになった。(外面的な自己表現／客観)
- ⑨ こころのバランスはどうでしょうか。(精神の健康／気づかい)
- ⑩ 部活を一生懸命頑張っているので期待しています。(学校生活／期待)

表 2 は，母親から得られたすべての記述内容を分類した結果をまとめたものである。まず 5 カテゴリーの出現比率を確認すると，息子に対する記述の場合では「学校内の様子」(35.2%) に関する比率が最も高く，続いて「内面的な自己表現」(31.5%)，「家庭内の様子」(25.0%) という順になっている。娘に対する記述の場合では「内面的な自己表現」(41.2%) に関する比率が最も高く，続いて「学校内の様子」(27.5%)，「家庭内の様子」(22.9%) の順になっている。全体では「内面的な自己表現」(36.8%)，「学校内の様子」(31.0%)，「家庭内の様子」(23.9%) の順である。この 3 カテゴリーで，全体の 91.7% を説明できる。「外面的な自己表現」や「身体・精神の健康」に関する記述は比較的少ない。やはり，身体的な側面(容姿など)よりも健康度を加えた心理行動的な側面に関心が向いていることが理解できる。

「内面的な自己表現」の下位項目では，息子と娘の高校生らしい態度への記述が多い。「学校内の様子」の下位項目では，勉強や進路への取り組みに対する我が子の現状を述べ，友人関係の楽しさや部活動への取り組みなどを温かく見守っている。「家庭内の様子」の下位項目では，家族関係(特に親子関係が中心)の変化を敏感に感じ取っている。これらのカテゴリー間に有意な性差は認められない。

次に，記述内容を 3感情(接近的，回避的，客観的)群の側面から捉えてクロス集計すると，「内面的な自己表現」では息子(25.0%)と娘(29.8%)の両方とも客観的・冷静な判断を行っ

表2 母親による高校生の息子・娘の捉え方 (%)

記述の分類	高校生	分 布	接近的感情	回避的感情	客観的感情
家庭内の様子	息 子	25.0	8.3	5.5	11.1
	娘	22.9	3.8	6.1	13.0
	小 計	23.9	5.9	5.9	12.1
学校内の様子	息 子	35.2	4.6	13.9*	16.7
	娘	27.5	3.1	6.1	18.3
	小 計	31.0	3.8	9.6	17.6
内面的な自己表現	息 子	31.5	1.9	4.6	25.0
	娘	41.2	5.3	6.1	29.8
	小 計	36.8	3.8	5.4	27.6
外面的な自己表現	息 子	3.7	0	0.9	2.8
	娘	6.1	0	1.5	4.6
	小 計	3.7	0	0.9	2.8
身体・精神の健康	息 子	4.6	0	2.8	1.9
	娘	2.3	0	0	2.3
	小 計	3.4	0	1.2	2.1
全 体	合 計	100.0	13.4	23.4	63.2

* $p < .05$

ており、全体の27.6%が相当する。いずれも性差は存在しない。「学校内の様子」においても客観的・冷静(17.6%)な視線で捉えていることがわかるが、回避的な感情は息子(13.9%)の方が娘(6.1%)よりも有意($CR=2.04, p < .05$)に高い。母親は息子の「学校内の様子」を心配と不満の目で捉えていることから、進路(進学)や勉強というテーマを娘以上に息子に対して一層期待しているのではないかということが理解される。「外面的な自己表現」と「身体・精神の健康」の出現率は低いですが、その記述に接近的な感情(安心や喜びなど)は含まれない。見方を変えれば、接近的ではない目で我が子の様子を見つめている母親の姿が受けとめられる。

2. 記述内容と BASIC 構造との関係

手続きの項で示した通り、母親(92名)に対して、自由に回答した記述の中から高校生の子どもについて一番主張したい文章(一番残しておきたい文章)を1つ選択させた。回答例が少ない場合には選択の幅が狭められるが、我が子への切なる思いが十分反映しているものと解釈した。ここで、母親が取り上げた文章のいくつかを列記する。

<男子高校生(息子)>について

- ①友達を大切にしているので、安心している。

- ②学校生活の様子を話してくれない。
- ③受験で大変だ。
- ④大学進学を希望しているが、アツという間の3年間で、ほとんど勉強をおろそかにしてしまい、最近になっておわれているようで心配です。
- ⑤年齢のわりには素直だと思う。
- ⑥学校での様子がわからない。
- ⑦勉強，勉強の毎日です。
- ⑧勉強は家ではやる気がない。
- ⑨夜遅くまで起きていて朝遅くまで寝ている夜型です。
- ⑩会話をもっとしてほしい。
- ⑪部活も休みなくあり，疲れているのだろうと思うこともあり，健康には気を配っているつもりではいます。
- ⑫やさしさ，思いやりがある。
- ⑬ほとんど毎日，休日も含み，部活と学校に励んでおり，よく頑張っていると思います。
- ⑭真面目ですが機転がきくか心配です。
- ⑮理屈が多い。

<女子高校生(娘)>について

- ①親をよく見ている。
- ②部活と学習の両立でいそがしい毎日です。
- ③自己中心的である。
- ④進路について悩んでいる。
- ⑤自主的に家庭学習をしている。
- ⑥高校生活にある程度満足しているようだ。
- ⑦自分なりにやっているつもりだろうが，考えが甘すぎる。
- ⑧母親(私)をわずらわしく思いつつある。
- ⑨携帯を持っていないことに不安を感じている様子(もちろん両親とも反対意見)。
- ⑩将来のイメージがまったくない。
- ⑪自分で考え判断し，行動できる。
- ⑫三人姉妹の末っ子でもあるので，わりとのんびりで，やさしさがあります。
- ⑬家事が好きではないが，出来なくはないのにしない。
- ⑭やりたいことが多すぎて，どれも中途半端で困っています。
- ⑮希望の本校の学科に入学できて，高校生活をエンジョイしているようです。

.....

表3 母親の記述と BASIC 構造との関係 (%)

因子構造	母親から見た一番の主張			母親から見た接近的感情		
	息子	娘	全体	息子	娘	全体
達成行動の強さ (B)	27.9 *	49.0	39.1	12.5 *	50.0	31.3
知名度と高業績 (A)	34.9 **	12.2	22.8	12.5	0	6.2
社会活動の貢献 (S)	13.9	12.2	13.1	62.5	43.7	53.1
知的能力の高さ (I)	0	4.1	2.2	0	0	0
性格や良い人柄 (C)	23.3	22.5	22.8	12.5	6.3	9.4

* $p < .05$, ** $p < .01$

これまでの『偉大性』要因に関する従来の研究（小学生，中学生，大学生，社会人を対象にしている）結果から，5因子（BASIC）構造仮説を提案してきた。そこで，母親が選択した記述文章の文意が主として5因子構造のどの因子内容に相当するかの分類を試みた。表3は，分類後の結果をまとめたものである。

高校生の息子に対する母親の主張（43回答）の比率は，「A因子（知名度と高業績）」に関係した内容（勉強，部活，進路など：34.9%）が最も高く，娘に対する主張（12.2%）よりも1%未満の危険率で有意（ $CR=2.58$, $p < .01$ ）である。おそらく，これは高校生活を通して実績をつむことを強く望んでいる姿であり，息子により強い期待を持っていると解釈できる。次に「B因子（達成行動の強さ）」に関係した内容（態度，行動など：27.9%）が続くが，これは娘に対する主張（49.0%）の方が5%未満の危険率で有意（ $CR=2.06$, $p < .05$ ）に高い結果である。母親にとって，息子以上に娘の方がきちんと考えて行動していることを見極めたい姿であると考えられる。娘に対する2番目に多い回答は「C因子（性格や良い人柄）」に関係した内容（性格のやさしさ，思いやりなど：22.5%）である。この2因子で全体の70%を超える。ここからも，息子には勉強や部活，進路，日常の態度，性格の良さなど，バランスが取れている人格像を求めていることが理解できる。一方，娘には態度や行動，性格の良さを強調する姿勢が見られる。

この点に関して，3感情群のうち特に接近的な感情（安心，喜び，期待など）の出現率を確認すると，娘の「B因子」（50.0%）が5%未満の危険率で有意（ $CR=2.29$, $p < .05$ ）に息子（12.5%）よりも高い結果である。また，全体的には高い比率にないが，「S因子（社会活動の貢献）」に関する内容が記述されている場合は，母親の望ましい期待や喜び（全体で53.1%）が表現される。母親の我が子への願いが如実に示されているものと思われる。なお，「I因子（知的能力の高さ）」に対する主張は，息子と娘の両方ともほとんど皆無に近い選択である。これらの

ことから、母親は我が子の性格の良さを重要視する一方で、我が子が高校生活の中で懸命に努力する姿を望み、その結果が実現できるように期待していると解釈される。

IV. 結 論

以上の諸結果から、母親に対する TST 形式による自由記述の結果をもとに、高校生の子どもへの捉え方を、おおむね次のように結論づけることができるであろう。

- (1) 全般的傾向として、母親の記述内容は「内面的な自己表現」への見方が顕著である。特に高校生としての「行動や態度」に関するもの、「性格の特性」に関するものが多い。以下、「学校内の様子」「家庭内の様子」が続いている。
- (2) 全般的傾向として、母親から見た高校生（息子、娘）への捉え方に顕著な性差があるとは言いきれない。
- (3) 記述を感情の側面から分類すると、高校生を第1には比較的客観的に、また冷静な目で捉えていることがわかる。次に、高校生を心配や不満の目で見ている。安心感や喜びの表現はかなり低い。
- (4) 「学校内の様子」をまとめると、いろいろな心配や不満を訴える傾向に性差（息子>娘、 $p<.05$ ）がある。
- (5) 母親が一番主張したい側面を「BASIC」の観点から分類すると、次の順となる。

「行動の基準と努力（B）」(39.1%)

「仕事や業績（A）」(22.8%)

「性格や人柄（C）」(22.8%)

「社会活動の貢献（S）」(13.1%)

「知的能力の高さ（I）」(2.2%)

2つの因子構造に性差が認められる。

「B因子」……………息子<娘（ $p<.05$ ）

「A因子」……………息子>娘（ $p<.01$ ）

- (6) 記述の感情群（客観的な感情群）は、「社会や家族への貢献（S）」が多い。また、接近的な感情群の中で1因子分野に性差が認められる。

「B因子」……………息子<娘（ $p<.05$ ）

【文 献】

- 1) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因について」, 1996, 日本応用心理学会第63回大会発表論文集, 中京大学。

- 2) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてII」。1997，日本応用心理学会第64回大会発表論文集，駒澤大学。
- 3) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてIII」。1998，日本応用心理学会第65回大会発表論文集，龍谷大学。
- 4) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてIV」。1999，日本応用心理学会第66回大会発表論文集，東京国際大学。
- 5) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてV」。2000，日本応用心理学会第67回大会発表論文集，神戸親和女子大学。
- 6) 藤田主一・高嶋正士：「人格の偉大性要因についてVI」。2001，日本応用心理学会第68回大会発表論文集，岩手県立大学。
- 7) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その1）特に，児童における偉大性要因の分析——」。1999，城西大学女子短期大学部紀要第16巻第1号。
- 8) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その2）特に，小学生と中学生による偉大性要因の比較——」。2000，城西大学女子短期大学部紀要第17巻第1号。
- 9) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その3）特に，中高年における偉大性要因の分析——」。2001，城西大学女子短期大学部紀要第18巻第1号。